国際シンポジウム報告

国際シンポジウム「道教と日本文化」報告

「道教と日本文化」と題した国際シンポジウムが，2004年11月5・6日の二日間の日程で，中国杭州市にある浙江工商大学を会場に行われた。主催は浙江大学日本文化研究所と中国日本史学会であり，神奈川大学人文学研究所は共催団体として名を連ねた。また参加者は，中国からは北京大学，復旦大学，武漢大学，南開大学，中国社会科学院，天津社会科学院，日本からは京都大学，大阪大学，東北大学，九州大学，早稲田大学，その他，韓国の江原大学，ベルギーのルーヴェン・カトリック大学，フランスの国立遠東学院などから，100名前後の研究者に上り，文字通りの国際シンポジウムとなった。神奈川大学人文学研究所からは，鈴木陽一教授，前川理子専任講師，前田禎彦専任講師，そして私の（伊坂青司）4名が参加した。

シンポジウムは，「道教と日本文化」と題されたとおり，中国の伝統文化としての道教が日本文化に与えた影響を検討することをテーマにして，様々な研究分野からのアプローチが行われた。全体の基調報告に続いて，「宗教と民俗」「典籍と漢字」「思想と文化」の三分科会に分かれ，それぞれの分科会では報告と討論が行われた。また二日目のパネルディスカッション「学際的・国際的視野から道教を見直す」では，パネリストがそれぞれの専門分野を踏まえて，道教文化へのアプローチを行った。二日間を通して充実した報告と活発な討論が行われ，道教と日本文化の関連をテーマとした国際シンポジウムとしては画期的なものとなった。浙江工商大学と浙江大学日本文化研究所の関係者のご尽力に心より感謝申し上げる。

以下，二日間にわたる全体プログラムを記すこととする。

【11月5日】

基調講演：新川登亀男（早稲田大学）「日本古代と道教」
　　王勇（浙江大学日本文化研究所）「鑑真渡日と泰山府君」
　　東儀俊美（日本芸術院）「宮中祭祀と雅楽」

分 科 会：宗教と民俗
　　佐藤弘夫（東北大学）「日本中世のコスモロジーと道教の神々」
　　ロベル・デュケンヌ（フランス国立遠東学院）「恵比寿－蝦夷：運命の神様と彼の「野蛮人」故郷」
　　方琳琳（浙江大学）「飛鳥・奈良時代の服飾から見える道教要素」
　　宇雁（浙江教育学院）「道教の「会」と祇園の「祭」」
　　真弓常忠（皇學館大学）「道教祭祀における道教的要素」
　　薗田稔（京都大学）「妙見信仰と道教」
　　野本覚成（天台宗宗典編纂所）「道教と密教の習合事相」
　　米山俊直（京都大学）「えびす信仰と道教」
　　三宅善信（金光教春日丘教会）「金神の再発見：道教信仰の近代日本における展開」

分 科 会：典籍と漢字
　　黄昭淵（韓国江原大学）「徳川日本と朝鮮の道教受容」

泉敬史（札幌大学）「春桃原をめぐる考察」
陳小法（浙江工商大学）「策彦周良と明代道教」
水口幹記（早稲田大学）「中国における風角書の変遷と日本における風角の不受容」
管寧（中国国家博物館）「「神仏之争」と陰陽占筮の受容」
矢羽野隆男（四天王寺国際仏教大学）「黄遵憲の神道研究－道教との関連で」
王宝平（浙江工商大学）「『日本国志』「神道」項の典拠について」
河野貴美子（早稲田大学）「善珠撰述仏典注釈書における老荘関係書の引用」
王金林（天津社会科学院）「日本出土の木簡と銅鏡に見られる道家文化の影響」
欽偉剛（四川大学）「福永光司と日本の道教研究」
何華珍（浙江財経学院）「日本漢籍と漢語俗字」

分 科 会：思想と文化
後藤昭雄（大阪大学）「日本の平安朝漢文学における神仙思想の受容」
吉原浩人（早稲田大学）「大江匡房の養生思想」
王麗萍（浙江財経学院）「入宋僧成尋と道教」
木幡みちる（早稲田大学）「道教をめぐる唐，朝鮮，日本の国際関係」
仁木夏実（大谷大学）「平安時代後期における庚申信仰について」
徐水生（武漢大学）「道家思想と日本近代哲学」
劉岳兵（南開大学）「夏目漱石の道家意識」
南谷美保（四天王寺国際仏教大学）「日本の雅楽と神仙思想」
韓昇（復旦大学）「五行と古代中日における職官の服色」
江静・吳玲（浙江工商大学）「道教医学の＜喫茶養生記＞に対する影響について」

【11月6日】
パネルディスカッション「学際的･国際的視野から道教を見直す」
パネリスト（報告順）：伊坂青司（神奈川大学），佐藤弘夫（東北大学），黄昭淵（江原大学），W・ヴァンドゥワラ（ルーヴェン･カトリック大学），Allan Grapard（カリフォルニア大学），薗田稔（京都大学），南谷美保（四天王寺国際仏教大学），韓昇（復旦大学）

（人文学研究所所長　伊坂青司）

浙江大学日本文化研究所・中国日本史学会主催，浙江工商大学日本語文化学院共催
『道教と日本文化』国際シンポジウム参加記

昨年秋，2004年11月，中国浙江省杭州で，一昨年の「サーズ」が原因で延期となっていた『道教と日本文化』国際シンポジウムが二日間にわたって開催された。

大会の主旨は，中国の伝統文化である道教が日本にもたらした広範かつ深い影響を歴史・文学・宗教・芸術などさまざまな分野において検証し，東アジア世界における中国文化の国際的価値を明らかにするという点にある。中国からは約50名，日本をはじめとする諸国からも50名以上の多数の研究者の参加を得た大規模なシンポジウムで，日本の歴史・文化をテーマとした中国における学会としては，おそらくこれまでで最大規模であろうとは，大会の実現に尽力した王勇氏の弁である。

初日，浙江工商大学総長胡祖光，浙江大学日本文化研究所所長王勇，中国日本史学会名誉会長王金林，

浙江道教協会会長高信一各氏の熱烈な歓迎の辞とともに大会がはじまった。

午前は，基調講演として新川登亀男（早稲田大学）「日本古代と道教」，王勇（浙江大学）「鑑真渡日と泰山府君」，東儀俊美（日本芸術院）「宮中祭祀と雅楽」の三本の報告が用意されていた。新川氏は日本古代における道教受容をめぐる研究の推移と課題を述べ，王勇氏は中国における最新の研究成果も折り込みながら鑑真の渡日をめぐる諸問題を明らかにされた。また，雅楽の大家であられる東儀氏は，現代の皇室祭祀のあり方にも触れながら宮中祭祀にあらわれる道教の影響を指摘された。いずれも基調講演にふさわしい視野の広さと鋭い問題意識をもった報告であった。

午後は「宗教と民俗」・「典籍と文字」・「思想と文化」の三つの分科会がもうけられ，私は，そのうち「思想と文化」に参加した。10本にわたる報告内容をいちいち紹介する余裕はないが，時代は古代から近代にいたるまで，分野は歴史・文学・芸術の各分野にわたって周到に準備され，力のこもった報告と短いながら活発な討論がくりひろげられた。また，通常，お目にかかれない，各分野の第一線で活躍する研究者の方々の報告を拝聴する機会を得たことはこの上ない喜びであり，刺激であった。うち5名の方は中国の日本研究者であったが，今回はレジュメ・報告・討論ともに日本語が用いられており，私のように中国について関心はありながら中国語はまったく解さない者にとってはたいへんありがたかった。しかし，そのぶん，いかに専門とはいえ中国の研究者の方々の負担は大きなものがあったのではなかろうか。

二日目は，各分科会の総括の後，パネル・ディスカッションが行われた。「学際的・国際的視野から道教を見直す」というテーマにもとづき，本学の伊坂青司先生も加わった10名の方をパネリストとして大会全般の成果がヨーロッパとの比較なども含めて多角的に論じられた。その後，浙江工商大学党委書記王光明，神奈川大学人文学研究所所長伊坂青司，四天王寺国際仏教大学南谷美保，日本神道国際学会理事長梅田善美，浙江大学日本文化研究所所長王勇の各氏の挨拶を得て，大会は無事終了した。

今回のシンポジウムは，日本における道教受容をテーマにかかげ，中国・日本の歴史・文学・宗教・芸術などさまざまな分野をおおう多数の研究者が一堂に集い，その成果を論じあったという点で，おそらく類をみない学会であったと思う。これによって，中国の伝統文化・宗教としての道教が，これまでの予想以上に日本社会の基層のいたるところに浸透していた様相が具体的に明らかになったことが，シンポジウム最大の成果であったと思われる。ただし，その受容が，（仏教に比べても）あくまで部分的・選択的な受容であったことも否めず，道教受容の全体像についてはなお曖昧さも残った。今回のシンポジウムを機に議論がさらに活性化し，深められることを強く期待したい。

なお，大会終了後，主催者のご好意で，多くの観光客でにぎわう秋の杭州を周遊することができた。おだやかな秋の日ざしに西湖がきらめくさまは美しく，しばし見る者の心をなごませた。また，湖畔の丘陵に位置する道観では道士による祈祷を見学することもでき，現代に生きる道教のすがたをかいま見る機会を得たことはとくに貴重な体験であった。

最後になったが，「サーズ」をはじめとする障害をのりこえてシンポジウムの開催に尽力され，また，心から私たちの参加を歓迎してくださった浙江大学・浙江工商大学をはじめとする関係者の皆様に深く御礼申し上げたい。

（前田禎彦　2004年11月5日，6日　浙江工商大学）

「道教と日本文化」国際シンポジウム報告

昨年一一月五・六の両日，中国浙江省杭州市の浙江工商大学で浙江大学，浙江工商大学，四天王寺国際仏教大学，神奈川大学人文学研究所による国際シンポジウム「道教と日本文化」が開催された。中国

側研究者約五〇名と，日本を中心にベルギー・フランス・ノルウェー・アメリカ・韓国などからの研究者と随員あわせて約五〇名が出席した。本研究所からは，伊坂所長，鈴木（陽一），前田，前川の四名が参加した。初日は基調講演が行われた後，分科会に分かれての発表，二日目は分科会のまとめとパネルディスカッションが行われ，伊坂所長がパネリストとして参加した。シンポ終了の翌日には杭州市内の道教関連施設を訪問し，道士との質疑応答，道教儀式の見学などが行われた。

シンポジウム第一日目午後の分科会は，「宗教と民俗」「典籍と漢字」「思想と文化」の三テーマに分かれて行われたが，私（前川）は主に「宗教と民俗」に参加した。中国の研究者，フランスなど海外からの参加者による発表のほか，日本からは神職，僧職，神道系教団の教会長など宗教の現場にも関わる立場からの発表数本があり，スライド等を使っての興味深いものもあった。日本への道教の影響というテーマからいえば古代や中世が中心で，それ以降の時代になると神道や仏教の儀式等に道教的要素が混入されているといった報告が目立った。

最終日に行われたパネルディスカッションは，日本の道教研究における問題点を共有しつつ，将来の研究の方向性を探るものとなった。日本の道教研究の問題は，教団宗教としての道教が日本に入らなかったために「日本の道教」の輪郭が明確でないことから多く生じている。中国道教を基軸に日本の道教をその派生として捉え，日本宗教内に散見される（中国の）「道教的要素」の析出に終始しがちである。そもそも日本の宗教は，道教とほかに神・儒・仏の諸教を習合，編成・分立しつつ時代時代で形成されてきたと考えることができるが，そうした中で道教の断片を探し出して“日本にも道教があった”のだと言うような研究にどのような意味があるのだろうか，というものである。

今後の可能性については，パネリストから次のような指摘がなされた。道教は複合的な宗教であり，日本において高次の教義から日常のレベルまで影響しているが，今後民衆生活への関心が高まるとき道教研究はより重要性を増してくる。そのため，個別的な研究をこえて，日本文化全体における位置づけ，相対的で歴史的な変容を視野に入れた研究を進める必要があるというもの。

さらに，国際的な視点で道教を見直すべきことも示唆された。古代において中国からの道教や仏教に対する反応が東アジア各国で異なっている。道教単独でみるのではなく儒・仏・道の三教のひとつとしてとらえ，各国のさまざまな反応の仕方を比較していくことは，例えば古代国際関係史にとって魅力的な課題になる。古代の日本人は道教を仏教に対するものとして把握した。日本の仏教僧にとって，「中国」固有のものとされていた道教を斥け，インドから中国に入った仏教を入れることは，中国を超え，相対化する意味をもつものであった。また国内をみれば，天皇には，神道成立時に道教を取り入れることで仏教に対抗するという姿勢がみられた。このように，日本に道教は存在しない／拒否された／一部台頭が見られたというような単純な結論ではなく，教団宗教としての道教を拒否しながらも場合によって一部摂取しつつ，どのように国家と社会，宗教や習俗をつくっていったかという見方においてこそ，日本の道教とのかかわり方を考えていく意味がある，と指摘された。

今回のシンポジウムは，各国から多分野の研究者が集まる学際的な交流の場となった。日本の道教はその曖昧さ，枠のなさゆえにやっかいな研究対象でしかなかったかもしれないが，それだからこそ政治史，民衆史，文学宗教に関連する諸分野の研究者の協同・交流の場ともなって，学際的研究を促してくれるものだとの感想をもった。

（前川理子）